その男、レプティリアンにより

椛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
その男、レプティリアンにより

【Ｎコード】
Ｎ０２５５Ｙ

【作者名】
椛

【あらすじ】
地球生まれの生粋の日本人（性別女）が不思議な夢を見た後で目を覚ますと……鱗人間（たぶん雄）に変身していた。
え？！えぇと、こういう場合の対処法って？！

すみません、タイトル変えました。内容には手を入れてないのでお気になさらず楽しんでいってください。

プロローグ

「あぁ疲れた……やっぱり会社の近くに家を借りて正解ねぇ」

ここは某所、最近建てられたばかりの新築アパートの一室。

「でも、忙しすぎて布団も干せないのは痛いわ！いい加減日の当たるベランダに干して、力いっぱい布団たたきで愛情込めてバンバンやらないとハウスダストが……でもそんな時は、じゃ～ん！これよこれ！庶民の味方ファブリーズに最近発売されたお日様の香り」

一人通販を始めた二十代後半と見られるこの女性は、ふんふーんと鼻歌を歌いながら煎餅布団に向かいファブリーズを発射し、そのまま放置して歩き出す。

「ふんふーん……さあスッキリしようじゃあないか私よ！」

しばらくすると、浴室の方から水音が響きだし彼女が入浴中なのだと気付かされる。

「だぁ～さっぱりした！！さて、至福の時間を始めようじゃあないか！！」

色気のないパジャマを着て浴室から飛び出した彼女は一人、喋りつづける。

「っかぁ～美味い！！この一瞬の為に私は日々頑張っているのよ！！」

冷蔵庫から出した冷えたビール片手にそう叫ぶ彼女。
そうして、真夜中酔いのまわった彼女は、一人フラフラと煎餅布団へと千鳥足のまま近づき、ばたっと倒れたかと思えば、女性のモノとは思えないほど物凄い高いびきが、真新しいアパートの一室に響き渡った。

「んにゃ〜むにゃむにゃ……。ぐぎょぉ〜ずごぉ〜ぐぉぉぉ」

＝＝＝＝＝サイド？？？

さぁ、めをとじて

これからおこりうるすべてのことは、まぶたをひらけばきえてしまうはかないゆめ

まるでらくえんにいるようにこうふくにつつまれることも

じごくにおとされたかのようにくつうにさいなまれることもある

どちらにころんでも、まるでげんじつせかいのように、あなたをなやませることでしょう

けれど、すべてはげんそうであり、くうそうであり、はかないゆめ

ゆめのせかいは、むげんにひろがりをみせ

ゆえにひと　とよばれるしゅぞくはひとつではなく

ちのうをもついきものはあふれるほどそんざいする

けれど、いのちがそだつにはあまりにもかこくなかんきょう

あなたがゆめみるせかいのなは　「　　」

さえぎるもののないこのゆめのなか

ゆらゆらたゆたうあなたのこころは、このゆうだいなるせかいのうみで

なにをえますか？

第一話　私は鱗人間（雄）！？

夢を、見た気がした。

男でも、女でもない声で、何かを、言われたような、気がした。

私は、まるで小さな子供のように、安心して、真綿に包まれたような暖かな空気の中で、目を……開けた。

「……は」

私は確かに、地球生まれ日本育ちの、正真正銘女のはずだった……よね？

目が覚めたら、自分が寝ているのはベットの形をした岩で、起き上がれば目に映るのは岩肌剥き出しの洞窟の壁。

「……なんなの、って」

思わず私は自分の首を自分で鷲掴み、その瞬間視界に入った大きな手にゾッとした。

「なんなの？何の冗談よ！？ねぇ？誰かいるんでしょ！！」

こんなところ知らない。こんな狭い、岩をくりぬいただけみたい

な洞窟見たことも来たことも無い。
私は、大企業とは言わないけど、この不景気な時代にしてはそこそこ儲かっている中小企業の事務をしてて、最近引っ越したばかりの新築のアパートに住んでいて、それで……今日だって仕事が終わってから寄り道しないで家に帰ってシャワーを浴びてビールを飲んで一服して、ファブリーズのお日様の香りのおかげで良い匂いがするふかふかの布団に潜ってオヤスミ三秒したはずでしょう？！

「こんな、この声は何なの？！それにっこの……」

この手……。

「これは、う、ろこ？」

嫌に光沢のある綺麗な鱗が、自分の手の甲にびっしりと生えていた。幸いと言って良いのか分からないけど、私はそこまで爬虫類や両生類に抵抗はないので大騒ぎするほどの事じゃないけど、

「だからって、なんで鱗？」

じっと自分の手の甲で堂々と存在を主張する鱗を観察する。冷静に見てれば、色は漆黒で、一枚一枚は薄いのに何枚も何枚も重なり合うように生え揃っているのがわかると、まるで芸術作品でも観ているような気になってしまう。それくらいグラデーションと並び方が美しいのだ。

「自分の身体に生えた鱗が芸術作品ってのもなんか複雑だわ」

冷静になると周りもちゃんと見えてくる。まぁもしかしたら、実は全然冷静なんかじゃなくて、ただ単に人生最大の危機的状況に脳

みそがアドレナリン大放出しているだけかもだけど！
それでも……私は十代の小娘じゃない。泣いたって喚いたって誰も助けてはくれないことを身を以て知って、痛いほど理解しているいい歳の女だ。

「まずは、状況の整理から……」

はぁ、とため息を一つ吐いて、脳内はフル回転。

「まぁ、暖かい布団でオヤスミ三秒した所までは良いとして。問題はその後よね……誘拐されて人体実験とか？」

私みたいな中途半端な歳の女を誘拐して鱗人間に改造したところでなんか得があるとも思えないけど……。

「この声も、正にこれこそ重低音よねぇ……私って、いま、もしかして」

……この身体、どう考えても女性のそれとは思えないほどガタイが良いし、声は低く、手のひらはゴツゴツしていてとても大きい。

あぁ神様仏様、この際妖怪でもなんでも良いけど、こんな岩肌剥き出しの狭い洞窟みたいな空間に鱗人間（たぶん雄）に変身させられ放置プレイされるほど、私……何か悪いことをしましたでしょうか？

第二話　熊族のトーリャ

今私は、頭を抱え悩んだり、神的な何かにぶつぶつと祈るのは諦め、目が覚めた洞窟を家探し中でございます……。

「ここって、まさか、この身体の持ち主の巣穴？」

とても信じられない。……なんて言うか、この場所はおかしい気がする。ただの洞窟にしては家具が置いてあるし、だけど……この部屋からは住んで居る者の個性みたいなものは一切感じられない。でも、何がおかしいのか、と聞かれるとなんて答えればいいのか分からないけど、そう！この身体の持ち主がどういう性格の持ち主かは知らないし知りたくもない。だけど、この洞窟が誰かの部屋だと考えるには生活臭みたいなものが欠けていて、例えるならどこかのホテルのような……

「……馬鹿らしい、この洞窟のどこがホテルなの？私きっとどうかしてるんだわ」

そうよ、身体だってこんな、鱗だらけだし！なんて自分の脳みそを怪しみだしたその時

コンコン

と、ノックの音が洞窟内に響き渡り

「ひっ……」

私は心臓が止まった　と思った……本気で！

「……次から次へと、何だってのよ！？」

とりあえずは心臓を押さえつつ、何が起きても命だけは助かるように岩ベットの陰に隠れ、苛つきながら耳を澄ませる。

大体、何が飛び出してくるのか知れた者じゃないこの場所も恐ろしいのに、その外側から来訪者が現れたなんて考えたくもない。

「えぇーとぉ、二ケットさぁん！！食事の準備が出来てますがぁ、お部屋と食堂どちらで召し上がられますかぁ？」

どんな恐ろしい生物がドアをぶち破り現れるのか？！と構えていると、部屋の外から聞こえた声はどう考えても幼い子供の声。それもこの洞窟がさっきの仮説通り、宿泊施設だとしたら説明が付く。

「つまり、彼（彼女）は家の仕事を手伝っているココの子供……」

「うぅ～ん、もしかしてまだ寝ているのかなぁ？そうしたら、ご飯どうするんだろぉ？よしっ、おとーさんに聞いてこぉようっと」

小声で自分なりの仮説を固めていると、その子も何やら考えが決まったらしく、この部屋の前から離れようとしているのがわかった。

「っ……」

私は走った。明らかに危険はなさそうな間抜けた声だったし、これを逃したらこの良く分からない怪しい場所でさらに理解したくないこの身体を抱えて生きていく自信もなかった。

＊＊＊＊＊とある宿屋の看板息子視点＊＊＊＊＊

初めまして、僕はいろんな種族の人が仲良く暮らしている大きな国「ブリード」の一番大きな町で、一番人気の宿を経営しているおとーさんとおかーさんの息子のトーリャって言います。この世界には、いろんな種族の人がいっぱいいます。僕は熊族のおとーさんとおかーさんから生まれたので純潔の熊族の雄で、今はよんじゅーなな才くらいだと思う。僕たちは長命種だから何百年も生きるし、あんまり自分の年を一々気にしている人も少ないっておとーさんは言ってたっけ？ちなみに、おとーさんは最後に数えた時さんびゃくごじゅう才くらいだったって。あと、おかーさんには絶対に聞いちゃいけないって何時もは優しいおとーさんが目をひゅってさせて言っ

たから、僕は良い子だし聞かないよって約束したんだ。偉いでしょ？

「トーリャ、もう夕方だ。ほら、行って来い」

僕は何時もお家のお手伝いをしてる。だってお客さんには色んな人がいるし、優しいお客さんはお菓子をくれたり、女将さんには内緒だよって言ってたまにお小遣いをくれる人もいる。皆、僕が生まれる前からこの宿に泊まりに来ているから僕とも仲良しなんだ。

「うん、でも、僕食べられちゃうかも……」

そうなんだ、いつもは顔見知りのお客さんばっかりが泊まる僕の家の宿に、昨日新しい人がふらりと入って来て…。その人すっごくすっごく怖いんだ。

「トーリャはお客様にそんな顔を見せるつもりなのかい？」

僕はおとーさんとおかーさんに頼まれればいつも喜んでお店を手伝うけど、今回は怖くて、僕なんかきっと丸呑みされちゃうんだって思ったら、お漏らししちゃいそう……。

僕がすっごく怖がっているのに、おかーさんは腰に手を当ててため息を吐いた。でも、きっと優しいおとーさんなら助けてくれる。そう思って僕はおとーさんをうるうるした瞳で見つめてみた。

「……」

「トーリャ！お父さんをそんな目で見るんじゃありません。あんたもさっさと調理場に戻って仕込みして！もうすぐ大酒飲みの客たちがわんさかやってくるって言うのに馬鹿やってんじゃないよ」

おかーさんは怒るととっても怖いので、おとーさんは熊族らしい大きな背中を可能な限り小さく丸めて、僕の顔をちらりと見た後、トボトボと調理場に行ってしまった。おとーさん……僕が食べられてもいいの？

「良いかい？宿はお客様あっての商売なんだ。トーリャもいずれはこの宿を継ぐんだろう？なら新規のお客は大事にしな。あんたの今後の為に言ってんだよ」

おかーさんはおとーさんを見送ると、僕に合わせて膝を折り、目線を合わせてから諭すように優しく言った。

「そりゃトーリャの坊主にゃちと早すぎやしないか？」

そう声をかけてきたのは、何日も前から宿に宿泊している狐族のリンリンさん

「でもねぇ、この子昨日のお客さんを起こしに行くのは嫌だなんて言うもんだから」

僕たちは食堂兼酒場の一階と宿泊客が泊まる二階の宿を繋ぐ階段にいて、ここにいたら昨日のあの人も降りてくるんじゃないかって僕としてはとってもドキドキしてる。

「あぁ、例のあの男かい？」

リンリンさんは眉と眉の間に皺を作って煩わしそうに金色の長い髪をかきあげ、忌々しそうに二階に目をやった。それを見たおかーさんは、困ったものだとまたため息を吐いて僕とリンリンさんを見つめる。

「あのねぇ、ここは宿屋なんだ。どんな種族のどんな客であろうと、他人に迷惑かけずに金さえ払ってくれるなら最高のサービスを提供する事に変わりはない。それに考えてもご覧？この宿を開いて数百年も経つって言うのに、狐族だの水人族だの有翼人種だの色んな客を持て成して来たけど、あの手の種族は一度だってこの宿の門をくぐることはなかった。自分の一族の村から出てくる事自体物凄い珍しい出来事だからねぇ……今回の旅人の反応が良ければ新規の客がわんさか増えるかもしれない。トーリャ、あんたの時代も明るいかもしれないよ！」

ばんっと勢いよく僕の背中を叩いたおかーさんは気分が良さそうにこにこしている。でも僕に力自慢の熊族のおかーさんの力は強すぎて、もしリンリンさんに支えてもらえなかったらきっと叩かれた拍子に倒れていたと思う。でもそれを言ったらおとーさんに叱られるし、おかーさんが悲しむから内緒にしておく。

「そうは言ってもねぇ、トーリャの坊主は嫌なんだろう？」

「……だって僕なんかガブリって食べられちゃう」

リンリンさんはそう言うと、僕の頭を撫でてくれた。やっぱりリンリンさんは優しくて、自慢の金色のしっぽもふさふさだし、たまに簡単な毛づくろいの仕方も教えてくれるからだぁいすき！

「お馬鹿！確かに見た目は怖いかもしれないけど、あのお客さんだってきっと悪い人じゃないさ。だいたい普段からお母さんに黙ってお菓子ばっかり食べて、ぷくぷくしたあんたを食べたって甘すぎて吐き出すに決まってるよ！！さっさとお行き！」

僕がリンリンさんに甘えてすり寄ると、それを見たおかーさんは怒って僕を階段に押し出した。僕、そんなに太ってないよ……おとーさんだって我慢は良くないってお菓子作ってくれるし、お客さんも可愛いねってお菓子くれるし、あれ？僕そんなに食べてたっけ？

おかーさんをあれ以上怒らせたらおとーさんに叱られちゃうから、僕はまあるいしっぽをプルプル震わせながら例のお客さんのお部屋にたどり着いた。

「……だいじょぶ、食べられそうになったらリンリンさんを呼べば飛んで来てくれるって言ってた」

すぅーはぁーすぅーはぁー

「えぇーとぉ、二ケットさぁん！！食事の準備が出来てますがぁ、お部屋と食堂どちらで召し上がられますかぁ？」

とんとん　扉をたたいても返事はない。

うわぁーい！まだ起きてないんだ、これで僕食べられずに済んだ！僕はるんるんと、来たときは震わせたしっぽを楽しくふりふりしながらくるりと扉に背を向けた。瞬間、

「待てっ！」

何のお返事もなかった扉の向こうから鋭い声が聞こえて、おとーさんのもおかーさんにも大声を出されたことのない僕は、ほんの少しちびった……。

「う……おかーさんに叱られる」

第二話　熊族のトーリャ（後書き）

なんだか、主人公より熊族のトーリャに力を注いでしまいました……。

第三話　大熊男と狐美女

私は、とても焦っていた。だって、これを逃したら大事な獲物（情報源）に逃げられちゃうと思ってこっちだって必死だったのよ？！……なのに、なんで私こんな目に合ってんの？！

「アンタ、いい加減になんか言ったらどうなんだ。それとも……言い訳も出来ないようなことをこの子にしたんじゃないだろうね？！」

目の前には、黄金色の狐人間（たぶん美女）。現在、私は何故か一階の食堂らしき場所で公開尋問（拘束付）されています。

前門の狐、後門の大熊……なんで？

「……（私が何したって言うのよ？！）」

正直、食堂の椅子に縛り付けられたままで何を言えばいいのかが、私にはわからない。あの時、私はこの宿の子供を引き止めたくて部屋の中をなかば競歩の勢いで進み、ドアを勢い良く開けて、小さな熊人間を見つけた。うん、まさに小熊人間。自分が鱗人間である以上他人をとやかく言う権利は持ち合わせちゃいないが……その子を見た時、実はここが何かのテーマパークや遊園地で、私はきっと夢遊病に罹り各地をさ迷い歩いて保護されたに違いない。きっと、そうなんだと信じたかったけど、そんな時間も私には許されないらしい。

ぼぉっと小熊人間を見つめていたら、彼の穿いていたカボチャパンツみたいな半ズボンがそうと見てわかるほど色が変わり、

「あ……（この小熊、お漏らししたな）」

と思った瞬間。

「キャー！！たーべーらーれーるー！！リンリンさーん！！たーすーけーてー！！」

なんで？！私がいったい何したよ？！と問うまもなく、小熊くんは足元を濡らしたまま、トコトコときっと彼の全速力で、可愛いしっぽをフリフリしながら廊下を走り去りました。

それから数秒もしないうちに大熊人間（確実に雄）と狐人間（うん、美女ですね）が文字通り飛んで現れたかと思えば連行され、そして現在……。

「俺の子に、何しやがった？あぁ？客だから許されると思ったかこの変態野郎っ！！」

その厳つい顔には絶対似合わない可愛いフリフリの白いエプロンを着た大熊男は私の背中に向かい、容赦なく怒鳴ります。私これでも一応成人してますから、こんな公共の場でみっともなく泣き喚いたりしませんが、もしここが個室とかだったら自分が悪くないとしても……土下座してます。

「……（怖い怖い怖いどうなってんの？！）」

後ろにいるのに大熊男は威圧感半端ないし、狐美女も……私ずっと睨まれてるし。あぁ、そう言えばなんか言わなくちゃいけないのか……でもこの身体、男だよね？私とか言って大丈夫かな？ただでさえ、今も不審者扱いされてんのに、この空気の中でミスは出来ない。

「……俺は何も。話しかけたら餓鬼が逃げ出しただけだ（俺は話しかけただけで何もしてません。少し尋ねたいことがあったんですが、お子さんは走り出してしまったので）」

とりあえず怪しまれないためにも男口調で、長々話したりしてボロが出るのは回避したいから、必要なことだけ早口に言い切る。

「っ、俺の子はそんなに礼儀知らずではない！！」

まずい、大熊と小熊は親子だったらしい。怒鳴り声とともに背後からは物凄い重力が……。

「……アンタ、何しにこの王都へ来たんだ？」

その時、狐美女は私を鋭い眼で睨んだまま、低い低い声で聞いてきた。

「大体、アンタら種族は基本的に自分たちの縄張りから出てこない。何があっても周りには不関心で不干渉、悪く言えばただの引きこもり種族だ。まぁ、戦闘に特化したアンタらが外に出てくる時は大抵国家間の問題が関わる戦闘要員として高額で雇われた時くらいだし、出て来ないなら来ない方があたしらにとっちゃ助かるがね。それにしても、アンタは一人だ。いくら強いと言ってもたった一人で何しにこの王都へ顔を出したのか……アタシは気になってしょうがないんだが、教えちゃくれないかい？」

……気が遠くなってきた。もう、戦闘に特化した種族って

「……ちっ、言えない様な用事をしに来たってわけかい？」

食堂には、いつの間にかたくさんの人が。しかもなんだ良くわかんない生き物もいるし……もう！！私にどうしろって言うの？！
大熊男は今にも襲い掛かってきそうなオーラをにじみ出させていらっしゃるし、狐美女は不愉快そうにキセルをふかしだし、周囲にいる関係ない客たちまで興味心身で身を乗り出して見てるし！！つーか誰か助けろよ！！

あぁ、田舎にいるお父さん、お母さん、弟の健太、そして思い返せばずいぶんと長い時間を共に過ごした愛犬の壱。
ご無沙汰したまま、二度と会えない世界へと迷い込んだ娘もしくは姉でございます。お元気で居られますでしょうか？気がつけば私は、身体に鱗の生えた生き物（雄）に変身しておりました。ですから、きっと皆様と再会できても気づいてさえもらえはしないでしょう。むしろ通報され、警察どころか研究機関に売り払われたまま二度と太陽を拝めないような地下深くへ厳重に幽閉コースまっしぐら

のような気もしております。ですので、もしこの場を生き抜くことが出来たなら、私はこの土地に骨を埋めるような事態に相成るやもしれませんので、どうか無事身体が元に戻り、帰途に着けるよう遠いであろう日本の地より祈っていていただければ幸いです。

第三話　大熊男と狐美女（後書き）

誰かが読んでいる形跡は一切ございませんが、地道に細々と書き続けております（笑）

第四話　熊族のバンドォ（前書き）

小熊のお父さん、つまりは大熊男視点でございます。

第四話　熊族のバンドォ

＊＊＊＊＊side　大熊男

俺はバンドォ。人型獣種大熊族（ひとがたじゅうしゅおくまぞく）のバンドォだ。俺がこの王都に嫁のトリシャと宿を建ててからもう数百年、すっかり宿の外観は古び老舗宿の貫録が出てきた。

俺たち人型種族は何故か子供が出来ずらいことが当たり前で、百年二百年どころか子など出来ないまま生涯を終える番（つが）いも珍しくはない。そういう理由もあり、自分たちも気長に待とうと番（つが）った当時も話はしていたが、俺たちには嬉しいことに可愛い可愛い息子が誕生した。

まさに、自分の目に入れたとしても痛くも痒くもない。むしろ熊可愛がりしたいくらい可愛い一人息子だ。そして今日、その大事な大事な息子に不埒なことを仕出かしたらしい宿泊客の男を現行犯で捕まえた。今は使いに出てる嫁にもきっと褒められるに違いない！！

「おとーさん……」

息子のトーリャは可哀想にどんな酷い目に合わされたのか、お漏らしまでして、可愛いまん丸の目を潤ませている。

「大丈夫だ。父さんに任せておけ！！（この男許すまじ！！）」

椅子に縛られたその男は、以外にも大人しく、ピクリとも動かない。自他ともに認める強面のこの俺を見ても、言い訳一つせず、ただじっと前を見据えているように見える。

この男、出来る。それに、長期宿泊客のリンリン嬢とも昨日の時点で話してはいたが、この男の種族はあまり他種族との関わりを良

しとせずに生きる排他的な一族だ。住処も町や人の多い所は避け、山深い秘境であったり、砂漠地帯であったり、とにかくそんなところに生きているのだから生命力だけは人一倍ある。さすが伝説の龍種と血縁なだけはある。

奴らは人型両爬虫類種族（ひとがたりょうはちゅうるい）。俺たち獣種も力自慢だが、こいつ等には敵わない。奴らは知能も高く、知恵の周りも早いと聞く。そしてもう一つ、獣種なら数も多いから大熊族だの狐族だのと一族名も個々に存在しているが、閉鎖的に過ごしてきた奴らはもう、数が減る一方で絶滅寸前になり、ついには各地の秘境に散っていたその全てを纏め一族としたのだとも聞いていた。哀れなものだ、外の世界じゃとうに純潔を捨て、ハーフの道を選び取った者がほとんどだと言うのに、古き良き習慣に取りつかれ滅びの道を進むなど……。

しかし一方で、奴らはその生まれ持った身体能力を使い、この国に多くの貢献をしてきたらしい。これは公にはされておらず、あくまでも噂に過ぎんが……国同士の大きな戦争が怒る時、奴らは国に雇われる。そして戦争を終結へと導くのだ。これは戦に駆り出され、生きて戻った者たちが酒場で酔っ払い、歌うように話していたものだから信憑性はないが、兵士は皆口止めされているらしいので無理に聞きだすわけにもいくまい。しかし、戦争が終わるきっかけになっているならば、もっと英雄扱いを受けていても良いものなのでは？と俺も思っていたが、遠い昔に兵士が口から洩らした震えた言葉が、いつの間にか他国にまで流れ、奴らは嫌われ者になった。「あ、あ、みっみんな死んだぁ。みんな、ころされた！あいつらに！あいつらは、やつらはっせんそうをとめた！とめたんだ……みんなをころして！！あぁ、あぁあぁぁぁぁぁぁぁぁあああっ！！真っ赤の、皆真っ赤で、あいつらの鱗も、まっか……まっかで」そう言った男は、いつの間にか、この町からも、この国からも、姿を消した。本当は、どこを探しても見つからない所へ連れて行かれたらしい。

「……」

この男も、見たところいい歳っぽいが、戦争に出たことがあるのだろうか？そうして、人を、俺たちを殺すのだろうか。

第四話　熊族のバンドォ（後書き）

補足と言えるのか分かりませんが、一応紹介欄を。

主人公
中身は普通の地球産日本人女性。
身体は人型両爬虫類種族の雄。
今のところ、主人公は自分の置かれている状況も把握できていません。

小熊のトーリャ
人型獣種の熊族（子供）
王都の老舗宿を営む大熊夫婦の間に誕生した。宿の料理長をしているお父さんに可愛がられお菓子を食べ過ぎているせいか最近太り気味。

リンリン
人型獣種の狐族（雌で美女）
何の仕事をしているのかは不明だが、老舗宿に長期滞在できるほどの金持ちではあるらしい。ちなみに黄金色の毛並みが美しい彼女はプライドも高いが、宿の看板息子のトーリャを毛づくろいを手伝ってあげるくらいには気に入っている。

トリシャ
人型獣種の熊族（雌）
バンドォの番（つがい）であり、トーリャの母。普段は宿の気のいい女将さんをしている。いつもトーリャに厳しいように見えるが、実は泣き虫の息子が将来宿を継いでしっかりと生きていけるのか心配している優しいお母さん。

バンドォ

人型獣種の熊族（雄）

トリシャの番（つがい）であり、トーリャの父。普段は強面で客にも厳しい料理長。しかし実は妻にも息子にもデレデレと甘く、おかげで妻には追い払われ、息子はその素直さでメタボへ一直線……。チャームポイントは誕生日に愛する妻と可愛い息子に貰ったふりふりエプロンを嫌がりもせずに大事大事に使うその心意気？

第五話　女将のトリシャ

＊＊＊＊旅館の女将　トリシャ視点

あぁもうすぐ食事時、それが過ぎたら今度は酔っ払いどもの相手もしなきゃならないし……トーリャも寝かしつけなくちゃならないってのに！！まったく困ったものだよ。珍しいのは分かってるけど、そこまで騒ぐほどの事じゃないだろうに……。

買い物をしたらさっさと帰る筈が、例の宿泊客の事でちょうど噂を聞きつけたらしい城勤めの兵士に呼び止められて世間話程度に特徴やら、武装はしていたのか？とかそんなことを聞かれて思わぬ時間を取られてしまった。

まったくもって心外極まりない話しさね！！このあたしが、自分の宿に泊まる客の事をぺらぺらと話すとでも思っているのかね？そんなに軽い口を持っていたら宿は今頃潰れているよ！！……とは言ってもまぁ、相手が兵士じゃあ全く何も話さないわけにいかないだろう？だから言ってやったさ、そんなに知りたきゃ夜にでも、宿の一階にある酒場に飲みに来るんだね！！と。

「だいたい、酒場ってのは昔っから情報交換の場だってのに、女将のあたしから酒も飲まずにタダで情報だけ引き出そうなんて、昔なら尻の青い新人だってそんな真似しなかったってのに！！全く、最近の軍の上役どもはいったいどんな教育してんのかね？」

どんな仕事もはじめは見習いから仕事を仕込まれるのはどこも同じ、それがお国であっても変わりはしない。この国の歴史は結構浅いこともあって、あたしのところの宿は創業以来、国のお偉方ともそりゃいい付き合いをさせてもらっているわけで……国も宿も、思えば大きくなったもんだねぇ。城勤めの兵士達も、今は偉そうに門

前に立っていたり王様の警備をしていたりと重役をもらっちゃいるが、昔は良く弱音を吐きに宿の酒場に現れるただの見習いのハナタレ小僧だったのさ。見習いの薄給で出入りできて、しかも腹いっぱい食事がとれる酒場なんてまぁ、うちの宿くらいだからね。

「まったく、最近じゃトーリャもいるってのに悪酔いして騒ぐ馬鹿者も増えてるしねぇ……一度城に掛け合った方がいいかねぇ？」

あたしを知らない者が見ていたらきっとブツブツと呟きながら歩く熊族の雌はさぞ怖く見えたろうけど、幸いここはもう宿のすぐそばで、この辺はみんなご近所ばっかりだし誰を気にする必要もない。

そんな時、熊族の雌の中でも比較的大柄で、他種族とは比べ物にならないはずのあたしの全長を覆ってしまうほどの影が……

「すまないが、ここはブリード国王都のリエールで間違いないだろうか？」

「……」

デカい……。そんな、この国にいる大型獣種はそれこそ数えられないほど見てきたってのに……こんなに大きな種族は聞いたことも見たことも無い。その大柄な体に合う、大量の布で作られたであろうこれまた大きなフード付きのマントを着ていて見た目はさっぱりだが、足元には普通の旅用に設(しつら)えられた皮のブーツを履いていることから身長に不正は無いようだし……何者だろう？

「すまないが、ここは……」

あたしが目の前の雄に度肝を抜かれ固まっていると、雄は聞えなかったと思ったのか、また同じ質問を繰り返した。

「あっ、あぁ……そうだよ。ここはブリード国王都リエールだ」

あたしははっとして急いで答えるが、その雄はなおも質問してきた。

「では、この辺で一番大きな宿はどこか分かるだろうか？知り合いと待ち合わせしていてな」

フードの中が気になってちらちらと目をやっていると、その雄はそう言い放ち、あたしは客の知り合いか？と訝しんだけど、まぁ本人がそう言っているのだから連れて行くほかには無いか、と道案内を申し出てみた。どうせ目的地は同じだしね。

「あぁ、この王都で一番大きな宿をお探しかい？丁度良い所で出会ったものだねぇ！！あたしがそのお探しの宿の女将さ。歓迎するよ、お客さん！！」

すると、その雄はそのフードを脱ぎ、

「それは助かる、思い切って声をかけてみて正解だったようだ。ところで俺と同種の雄が一人、そちらの宿にお邪魔していないだろうか？」

その雄は、まぎれもない……人型両爬虫類種。緑の色をしたその鱗は、つるりとした顔の表面を覆いかくし、光の加減で輝くその配色はとても美しい。

「あんた、あのお客さんの？」

確かあのお客さんは漆黒の鱗を持っていた。しかし、この種族は皆こんな風にデカいのかね？……うーん、昨日の客も頭がすれすれだったってのに、こりゃ宿の天井が心配だね。

「……確かに、同種の同郷だ。生憎、アイツの忘れ物を届けに来たに過ぎないものですぐにも一族の地へ帰るがな」

故郷が好きなのか、外がお気に召さないのか知らないけど……どんだけ引き籠りなんだい？

と、そんなことを話している間に宿の入り口に着いていたみたいだね。さ、トーリャに晩御飯を食べさせて早く寝かせてしまわないと、酒場の客が集まってきちまうね。

「女将さぁん！！待ってましたぁ！！」

頭の中で忙しくこの後の行動リストをざっと確認しながら門をくぐり、廊下を進んでいると……あれは厨房見習いの人型魚種（ひとがたぎょしゅ）水人族のレビュールじゃないか？何をそんなに慌てて……？

レビュールは腕を振り、水人族特有の指の間にある水かきをひらひらさせながら走りよると。

「女将さん大変なんですぅ！！！大将とリンリン嬢がぁ例のお客さんを縛り上げちゃってぇ！！でも、お客さんは別に何もしてないんですぅ！！掃除係のグールもちゃんと見てたんですよぉ？！お客さんが何か言う前にもうすでにトーリャの坊ちゃんはお漏らししてぇ」

……あぁ、やめとくれっ！！レビュール！！あんたにはあたしの背後に立つ雄が見えていないのかいっ？！だいたい遅れたとは言え、たかが数十分留守にしただけでどうしてそうすぐに大騒動が起こる

んだい？！あたしゃ……番選(つがい)びを間違えたかね？

「……例の客、と言うのは」

背後に立つ雄はぽつり、とそう呟き

「俺の同族の事だろうか？」

そう問われてやっとその雄の存在に気が付いたレビュールは……

顔色を変え、広がった水かきも縮ませて

「ぼ、ぼくぅ……まだ仕込み途中だったので失礼しますぅ！！」

そう言い残すと廊下の向こうへと姿を消した。

……レビュールは減給決定！！

「……お客さん、少し時間を頂いても良いかね？あんたの同族は、あたしがきっちりと無傷でここに連れてくるからさぁ」

「……」

あたしから滲み出るこの気迫に押されたのか、その雄は静かに頷くと廊下にあるベンチに腰を落ち着けた。

そしてあたしは……ゆっくりと騒がしい食堂に足を進め

「……」

食堂入口から内部の様子を確認して、

「……あんた？リンリン嬢も、いったいここでなにをしてんだい

？！」

まず、丈夫だけが取り柄の旦那へ飛び蹴りをかまし、リンリン嬢や、その辺でこの騒動を囃し立てていた馬鹿な酔っ払いどもを黙らせた。

第五話　女将のトリシャ（後書き）

引き続き紹介欄でございます。

人型魚種水神族　レビュール（雄）

俗にいう魚人と言われる彼らは、水陸両方を生きる種族であり、その特徴ゆえに漁業の仕事で成功を収めている一族。その他、海上レストランなども経営していて、水人族の親は子供が生まれると早いうちから知り合いの料理人などに頼みこんで修行をつけてもらう決まりがあるらしい。

第六話　同族？謎の鱗男

＊＊＊＊＊ｓｉｄｅ主人公

この食堂に運び込まれ縄で縛られて、あげく尋問が始まってどれくらいの時間が経過したのか今の私には知るすべもなく……って言うか解放して！！ヘルプミー！！

「……なぁ、いっその事城の兵士に引き渡した方が早いんじゃないか？」

そう切り出したのは、大熊男でも狐美女でも子熊でもない。その辺の酔っ払いのオッサンどもだった。

「……（冗談じゃない！！私何もしてないのになんで兵士？！警察より怖いわっ！！）」

ここが日本で、法律もあって人権も保障されているなら悪いこと何もしてない証明に警察行っても良いけど。こんな良く分かんない動物王国みたいなとこで、今の自分は不審な鱗人間（雄）でしかないのに一昔は前っぽい時代の兵士さんに引き渡されたら……拷問、冤罪、死刑。

あぁ、そんな、私の人生？いや鱗だから今は爬虫類の命もここまでか……。

「あっ、おかーさんだ！！」

自分の運命に嘆いていると、諸悪の根源である子熊小僧が嬉しそ

うな声を上げた。……空気よめってーの！！

「……あんた？リンリン嬢も、いったいここでなにをしてんだい？！」

何やら背後で凄い轟音が鳴り響いたと思ったら、巨体の大熊（雄）が吹っ飛び、あたしの真横を通り過ぎた。

「……っ（ななななっ！！何？！今度は何が起きたの？！怖いっつーの！！もう家に帰りたいぃ！！）」

私の背後にいたはずの大熊男現在目の前……と言うには少し遠い所へ倒れ込んだままぴくりとも動かない。周囲にいた酔っ払いも、どうやら今ので目が覚めたようで顔色が青ではなく白へと変わっていらっしゃる。

「お客さん、すまないね？すぐに縄を解くから、じっとしといておくれよ？」

背後からかけられるその声は、女の人？まぁ子熊小僧がおかーさんって言ってたしね。とりあえず、多分さっきの攻撃はこの女性が放った一撃なのだと考えると、ひじょーに！！とてつもなく怖いけど！！……一応助かったのかな？

「まったく、この宿にいるのは馬鹿ばっかりで、ほんと悪いことしちまったね。その代わりと言っちゃなんだが、宿代は半額に負けとくから勘弁しとくれ」

縄を解かれ、立ち上がるとそこにいたのは……熊の耳を生やした気の強そうな女性。まるい耳はぴんっとまっすぐ上を向きたまにピ

クリと動くその様子は凄く可愛いけど、その大柄でつり目の女性にはミスマッチで、まぁそんなギャップが彼女の堅そうな空気を緩和していて丁度好さそうでもある。

「……あぁ、構わない（えっ？別にあなたが謝ること無いと思いますけど？それに宿代半額で良いって、正直私お金持ってるか自分でも不明なんで助かります！！）」

彼女の提案にありがたーく乗らせてもらった私は、そういえばこの状況はどう解決されるのだろう？と周囲を見渡す。

公開尋問の為に壁際に寄せられて見た目ぐちゃぐちゃのテーブルと椅子の数々、囃し立てていた酔っ払い集団、しっぽを伏せて意気消沈したままの狐美女、そして吹っ飛ばされたまま目を覚まさない大熊男が倒れ込んだ際に壊れたであろう物の残骸、いまだに汚れたズボンを穿いて涙目の小熊、怒る熊耳の女性……カオスってきっと、こういうことを言うのね。などとその時の私は他人事のように考えながら、何をするでもなく茫然とその場に突っ立っていた。

「お客さん、ここは良いから廊下に出て。お知り合いが訪ねてきてそこで待ってるよ」

熊耳女性は衝撃の一言を言い放つと、今度は気絶したままの大熊男に拳を一発……。

「……知り合い？（えっ？知り合いってこの身体の知り合いですか？！やばいよそれっ！！私は知らないよ！！って言うか殴り過ぎっ！！熊男死んじゃうよ？！）」

この場はもう完全に熊耳女性に支配されており、私の呟きに耳を傾けるお方など一人もおりませんです、はい。

仕方がないので私は一人、自分のではないけどこの身体の知り合いだと言う人物に会うため廊下へ……。

……えっ？この人じゃないよね？人違いでしょう？！別の人……ってこの人しかいないのかよ？！

「……待ちくたびれたぞ。いったいどんな騒動に巻き込まれていたのやら……はぁ、だから出ていくのはもう少し考えてからにしろと言ったろう？外の世界と言うものはどこまで行っても我らには易しくないのだ。長老も、戻ってきても構わないと仰っておられた。戻ってこい、な？」

廊下に出ると、一目でわかるほどの異彩を放つ人物が、これまた堂々とベンチに腰を掛けているではないか。今更……この人じゃありませんように！と祈ってももう遅い！その人物、何故に目立って

いるのかと聞かれれば、この身体と同じ鱗持ちの上、座っていてもどんだけだよ？と聞きたくなるほどの巨体で有らせられました。
男の身体はマントに隠されていて見えないけど、その顔は特徴的でこの身体と同じように顔の半分ほどが鱗に覆われ、そのグラデーションもとても美しい。

「……（自分の鱗も綺麗だと思ったけど、この男の人の鱗もなかなか良いわねぇ……）」

「おいっ、聞いているのか？全く、無口なところは何時まで経っても改善されないな。番（つがい）を探すのは結構だが、早く戻ってこい。皆心配している」

えぇと、番（つがい）を探すって……誰が？
その時、目の前の男から吐き出された深いため息を、訳も分からないわたしはただ、ぽけっと眺めていた。

第六話　同族？謎の鱗男（後書き）

感想お待ちしております！！

閑話　グールは見た

＊＊＊＊＊＊side使用人頭　兼　掃除係りのグール

「よっ、と」

宿の二階で客室を掃除する一頭の成獣。パリッとした純白の制服を着て隠してはいるが、そのふわふわしたクリーム色の羊毛は服の中にあっても決して存在感が薄れることはなく、唯一晒されている頭部など……きっと誰が見ても一度は触れてみたいと思うはず！！そのもこもこふわふわのくるんと巻かれた羊毛を揺らし、額のあたりからは二本の角が生えている。見たところ、客室から集めたのかたくさんの洗濯物が入った籠を抱えていると言うのに、音も立てずに廊下を歩いている。彼はその種族の特性か性格も穏やかで優しく、何事も笑顔を絶やさずにそつなくこなしてしまう為、客からもトーリャからも女将や料理長の夫婦からも信頼の厚い人型獣種（ひとがたじゅうしゅ）の羊族（ひつじぞく）、名前をグール（雄）と言う。

「ふぅ、とりあえず日中活動するお客様の部屋はすべて回ったから……これを洗濯して」

「あー！グールさん、また私の仕事を！洗濯は私の仕事なのに、女将さんに知られたら叱られるのはこっちなんですよ？」

と、そこへ声をかけるのは……グールの仕事仲間で宿の洗濯係をしている人型鳥種豆蜂鳥族（ひとがたちょうしゅまめはちどりぞく）のキイ（雌）。

なのだが……目の前で腰に手を当てぷりぷり怒る彼女は、一族名に豆と付くのも頷けるほどとても小さい。背など、一般他種族の雄とそう変わらないグールの腰ほどもなく、その足腰も細く色も白い

ので、本当にこの子は成鳥なのかな？といつも見ていて危なっかしい彼女を手伝ってしまう。その度に彼女から自分はもう幼鳥ではないのだから放って置いて下さい！！と言われても、なんだかなぁ？いまいち納得が行かない。

「うーん、でも……ほら僕自分の仕事はもう終わらせたんだ。だから、空いた時間にキイの手伝いをしても、きっと女将さんは怒ったりしないと思うよ？」

「それは、グールさんが宿の皆から信頼されているからで……私なんか折角集めた洗濯物、転んで泥まみれにしちゃうし、まだ寝ているお客さんのお部屋に間違って入室してしまったり、この間なんて料理長のエプロンを色物と一緒に洗っちゃって」

う……料理長のエプロンってもしかしてあの？

唯でさえあの真っ白でフリルのひらひら踊るエプロンは、厳つい料理長にあまり似合っていない……と言うよりも別の意味で怖さが増していると言うのに、あのエプロンがピンクや黄色に染まってしまったら、なんてことはあまり考えたくないなぁ。

「あのエプロン、女将さんと坊ちゃんに貰った大事なものだったみたいで……わたしっ！」

キイは、俯いて両手を握りしめて黙ってしまう。

「……ふぅ」

とりあえず、大量の洗濯物入りの籠を床に置き

「それで、どうしたんだい？確か、料理長は今朝もいつも通りあ

のエプロンを締めていたはずだけど」

「……お風呂係のセンリが助けてくれました。あの子、私より若いのに、何でも知ってて」

ふむ、まぁセンリなら納得だなぁ。あの子は年の割に器用だし、確かに知識も豊富だ。なんて言ってもこの宿では女将さんと料理長以外では僕の次に古株だしなぁ……それにしてもキイは失敗が多い。彼女が一生懸命なのは本当に良く伝わってくるが如何せん不器用で背も低く、内面もまだ少し、幼い所が見え隠れしている。その一族によって一人前と認められる時期も年齢も異なるため、彼女が成鳥だと言うならきっと本当なのだろうけど、豆蜂鳥の族長は何を以てそう判断したのか。

使用人頭の僕としては、もう少し落ち着いて行動してくれないことには次の報告会で女将さんに減給処分を告げるよりほかなくなるのだけど……もう少し様子を見てみるか。

「キイ、良いかい？君は確かに失敗も多いし、慌てすぎて物を壊すことも間々ある」

そういえばこの間も前が見えなくなるほど洗濯物を抱えて歩いていて、危ないから持つ量を減らすように言おうとしたらもう壁にぶつかって、出窓に飾っていた花瓶を割っていた。しかも花瓶の水をかぶり、洗って後は干すだけだった洗濯も汚して二度手間になっていたような……。

ふとそんなことを思いだして、彼女を見れば俯いたままだが耳は真っ赤で。

「……君は、もう少し考えて行動をすればきっと良い洗濯係りになると僕は思うよ。そうだね、例えば何をするにも一呼吸おいて、

どう行動すれば自分にとって一番効率が良いのか考えてみるとか。……キイはきっと言われたくないだろうけど、君は身体が他の者たちよりも小さく、腕力も体力もないのだ、ということをまず自分でしっかり理解して、その上でどうすれば今よりもより良く仕事が進められるのか考えなければね？」

僕がなるべく優しく聞こえるように、膝をつき、彼女の顔を覗き込みながらそういうと、彼女はばっと顔を上げ、涙を瞳に耐え、叫んだ。

「考えてますっ！！いつもいつも！！私はみんなより小さくて手も足も短いからっどんなに急いで洗濯物を集めても、凄く時間がかかるし！！だから出来るだけ一度に一杯運んで時間短縮しようとかっ！！センリにもお洗濯のコツを聞きに行って、シーツはぐっすり寝られるようにハーブの練り込まれた石鹸で洗ったり！！ほかっ、ほかにも！！」

僕は彼女の頭部に掌を乗せ、落ち着かせようとその橙色の髪を梳きながら囁いた。

「……君がとても頑張っているのはようく知っているよ。女将さんも、料理長も、センリだってそう知っているからキイに助言を惜しまないだろう？知っているから、僕たちもキイの仕事が上達すればいいと思っているから言うんだ。背が小さくて、手や足が短いなら、僕らみたいに大きな籠いっぱいに洗濯物を持つことは出来ないんだ。良いかい？キイには出来ないこともある。無理には運ぼうとすればまた、荷に目を覆われてお客様や壁にぶつかって宿のモノを壊してしまう。なら、どうしたら良い？」

「……わか、わかりません」

僕に向かって叫んだのはついさっきなのに、今度は小さな声で首を振るキイ。

「たとえば、道具……カートを使うとか」

そこで、僕が提案してみるが

「でも、カートなんて、宿にないし……」

そう否定し、唇を噛んで目を伏せる彼女はやはり、まだまだま幼鳥だなぁ……。

「ふぅ、仕事に必要な物なら経費で落ちるさ。大体、女将さんが君を雇った時から何かしら必要な物は出てくるだろうと思ってはいたんだ」

僕は目線を上に向け、そういえば予算どれくらい残っていたっけ？と思い出してみる。

「っでも、そんなお金」

「……カート一つで仕事の効率上がるなら儲けものさ。それより、キイ？」

「はっはい」

「君ほど小さな者はこの宿には他に居ないからねぇ。何が不便で、何が自分の仕事場に必要かなんてことは本人にしか分からないものさ。だから、これからは泣く前に自分で考えて、必要な物は必要だ

と報告しなさい、良いね？」

「……はい。ありがとうございます！！」

泣いた豆蜂鳥がもう笑っている。まったく浮き沈みの激しい子だなぁ。

けれど、ここで働いていっる者たちには皆笑顔でいて欲しいと言うのも僕の本心なので、少し安心して彼女の頭部を一撫でし。話しは終わったとばかりに僕は立ち上がり、また洗濯物入りの籠を持つ。

「それじゃあ、時間短縮のためにも、この籠は僕が洗濯場まで持っていくからキイは先に行って道具を用意していて？」

そう声をかけると、彼女は少し躊躇して、けれどしっかり頷き走って行った。

「……うーん、廊下は走らないよう毎日言っているのになぁ」

まぁ、彼女がぶつかったところで大柄なお客様たちには痛くも痒くもないだろうし、それはまた改めて話して聞かせるとしよう。

僕は籠を抱え、廊下を滑るように歩いて行く。すると、前方から階段を駆け上がり進んでくるトーリャ坊ちゃんを発見し、様子を見ていると……。あれ？あそこは確か創業以来使われていなかった特殊な客室のはず。

「今日来たお客様ではないはずだから、昨日だよなぁ……うーん、僕昨日はお休みだったからなぁ。それにしても、受付の担当は誰だろう？あのお部屋が埋まったなら使用人頭の僕に一言あっても良いはずなのに」

宿にある客室は皆どの種族にも対応できるように特殊な内装をしているものが多いが、あの部屋は特に変わっていると長く務める僕でも思う。なにせ部屋のすべてが岩で出来ているのだ。寝具さえも岩石ベットで、温度は高めで設定されている。……岩のベットで寝てもちゃんと眠れるのだろうか？

「まぁ、埋まっているなら宿泊客は人型両爬虫類族で決まりだねぇ」

そして、その部屋のドア……一枚岩で出来た入り口の前で我らが宿の看板坊ちゃんは小さなまあるいしっぽを震わせうろうろしている。

なにを……？声をかけるべきか考えた時

「……だいじょぶ、食べられそうになったらリンリンさんを呼べば飛んで来てくれるって言ってた」

と小さく坊ちゃんが呟く声が聞こえ、そのまま幼獣の彼が緊張しつつ息を吸い込んだのを見て、きっとまた女将さんに仕事の手伝いをせられているのだろうと納得し、邪魔をしないように静かに見守ることにした。

「えぇーとぉ、二ケットさぁん！！食事の準備が出来てますがぁ、お部屋と食堂どちらで召し上がられますかぁ？」

……坊ちゃんは岩で出来たドアを相手に必死で背伸びをしてとんとん叩いているが、室内まで聞こえているのか正直不安だなぁと思う。しかも、トーリャの坊ちゃんは相手が室内から顔を出さないのを喜んで、しっぽを楽しそうにふりふりしながらドアに背を向けた。うーん、これはお客様に対して失礼すぎるし、宿屋の跡取り息子と

してはどうなのだろう？女将さんに報告……かなぁ？そんなことを考えて腕を組み、ふ、と見ればいつの間にか、僕はまた洗濯籠を床に置いていたらしい。

「待てっ！」

突然、室内から背を向けた坊ちゃんを呼びとめる声が聞こえ、その瞬間トーリャの坊ちゃんは……女将さんに買ってもらって以来大のお気に入りで気が付けばいつも穿いている子熊の刺繍入りパンツを汚していた。

「……お客様の前でお漏らし、これはお説教コースだなぁ」

挙句の果てにその後、お客様の顔を見て大声で悲鳴を上げ、それを聞きつけた保護者により無実のお客様は連行されていった……。

「……女将さん、早く帰ってきてください」

一瞬だったけど、あのお客さん物凄く綺麗な顔をしていて、尚且つその瞳から威圧感が滲み出ていた。このまま怒らせたらこの宿、大丈夫かな……？

「あぁ、もう……とりあえず他の従業員が悪乗りしないように事情の説明だけでもしに行くかぁ」

とりあえず、最初の目的である洗濯籠を運んで、それから説明しに回って、後は食堂の値が張るものを仕舞って……はぁ、また経費が減っていくなぁ。

「……カートの分は確保しておかないと。それにしても女将さん、どこまで行ったんだろう？」

何か最近僕、こんな事ばっかりだなぁ……女将さん、給料上げてくれないかなぁ？

閑話　グールは見た（後書き）

紹介欄です。

人型獣種羊族　グール（雄）

王都の一番大きな宿で使用人頭兼掃除係を務める。仕事仲間や雇い主からの信頼も厚いふわもこな笑顔の優しい雄。

仕事着はパリッとした白いシャツと黒い長ズボンを穿き、その洋服の中にはクリーム色のもこもこした羊毛が仕舞い込まれている。額に生える二本の角は、何に使われるのか今のところ不明。

人型鳥種　豆蜂鳥族　キイ（雌）

本当に成鳥なのか不思議なほど小さく、内面も幼い洗濯係。

あまり仕事の効率は良くなく、良く失敗しては泣いている。しかし見た目のせいか、本人の一生懸命さゆえか、宿の皆には可愛がられているらしい。

身長は、平均的な他種族たちの腰ほどもなく手足も細く肌の色は白い。髪は橙色をしていて、日に透かすととても美しい。

第七話　猪マダムと豚主人（前書き）

更新が遅くなり、大変申し訳ございません。
うっかり引いた風邪が長引きまして（苦笑）しかも各小説を順番に更新していますので、レプティリアンへたどり着くのも時間がかかりました。あまり物語的には進んでいないのが現状でございますが、楽しんでいただければ幸いです。

第七話　猪マダムと豚主人

「お前が故郷を出てから、こっちでもいろいろ調べちゃいるんだがなぁ」

小さな店の小さなテーブルを前に、これまたこじんまりとした椅子に腰かけ、しみじみと話しかけてくる鱗男。

あの初対面から十分ほどが経過して、一人で勝手に話していたはずの巨漢の鱗男に図体のデカい男が二人も宿の出入り口へ居座っていたら迷惑になるだろう？と指摘を受け移動した先で、私達は向かい合い座っている。

「……（あぁ可愛い店！これはやっぱり店員もメルヘンな小動物系かな？）」

宿泊先の宿から二軒先にある小さな定食屋。見た感じはアットホームで、煉瓦で建てられた可愛らしいお店だったから、てっきり店員さんもそんな空気を読んでメルヘンチックで見ていて微笑ましい気持ちになれる生き物のはず！！そう勝手に期待してしまい癒しを求める自分がいて。今までが今までだし、もう今更ナチュラルな人間を出せ！とは言わないけど、せめて今度こそ可愛い系で！！と思って期待していたのに……店に入り席に座ると注文を聞きに来たのは

「……注文は？」

「……（ぶ、豚がテンガロンハットかぶってる……。）」

そう、注文を取りにやってきた店員は豚。しかもテンガロンハッ

トをかぶり、カウボーイ風の洋服まで着ているのを見て、私は正直引いた。

「おい、何を食うんだ？金ならお前が忘れて行ったのを長老から預かっているぞ？」

鱗男は私の目の前に堂々と座り、偉そうに聞いてくるが……それって結局この身体の、つまりは私のお金じゃないの？！

「……何でもいい（もうっ何だっていいわよ！！どうせゲテモノに決まってるし！！）」

私は店員が豚なことも鱗男が人様のお金を偉そうにあてにしていることにも苛々して、もうどうにでもなれっ！と半ばやけくそ気味に返事を返した。

すると豚男と鱗男は何やら二人だけで話し始めた。

暇になった私が店内をじろじろと行儀が悪くも見回していると……店内には手芸の作品なのか何かの毛で編まれたレースや装飾が飾ってあり、なかなか見ごたえがある。可愛いものに囲まれると言うのは意外と楽しくて、暫くそうしていると店の奥、変わった形の扉が開き中からワンピースを着た小柄な豚さんと、シャツに蝶ネクタイを締め、かぽちゃパンツを穿いた三つ子っぽいそっくりな子豚君が三人？歩いてきた。

「あら、いらっしゃいませ」

ワンピースを着た、よく見ると耳にリボンなどを付けて中々おしゃれな豚さんに話しかけられ、つい

「……豚？（えっ？！煉瓦のお店に！？三匹の子豚？！）」

と口走ってしまった。てっきり女性らしい口調の彼女に怒られるかと思いきや、意外に心の広いらしい豚さんは穏やかな口調でこう教えてくれた。

「ふふっ、やっぱり。皆さんお間違いになられるんですのよ。似ていますけれど、こう見えて私(わたくし)は猪族出身ですの。夫は豚族なのですけれど、ですから私(わたくし)たちの間に生まれましたこの子たちはイノブタ族と言う括(くく)りになりますの」

……マダムかっ？！怒られなかったのは助かったけど、話し方ミスマッチすぎるから！！正直どう反応返せばいいのか分かんないし、だいたいにして、あのテンガロンハット豚男とこのリボンマダムが夫婦って……。

「……そうか、悪かったな（まぁ、そりゃ誰だって間違えると思うけど……豚呼びは悪いよね？）」

「宜しいですわ。そのかわり、と言っては何でございますけれど……主人の美味しい料理を沢山お召し上がりになって幸せなお気持ちでおかえり頂ければ。そして宜しければ、どうぞまたご来店くださいまし」

う、さすがこのマダムもやっぱり店主の奥さんなだけあるなぁ。

「おい、ここの主人が本日のおすすめが結構美味いって言うからそれにしたぞ？」

奥さんの微笑みに若干押されて、とりあえず軽く頷けば、彼女は子豚たちを引き連れ洋服を買いに行くと店を出てった。そして一息

つく前に、今度は鱗男が本日のおすすめがどうのと話しかけてきて、

「……あぁ（もう、さっき何でもいいよって返事したでしょうがっ）」

本当に美味しい料理が出てくればいいけど、もし真面目に恐ろしいものがテーブルに置かれた場合私はどうすれば良いんだろう。あのリボンマダムの手前一口も食べないわけにもいかないし……あぁ、もう怖いよぅ！！

第七話　猪マダムと豚主人（後書き）

紹介欄は次回にまとめます。

第八話　愛妻家のブルゥ（前書き）

正直、閑話にした方が良いのかちょっと考えたのですが、悩み過ぎてわけが分からなくなってきたので（笑）八話として投稿いたします。

第八話　愛妻家のブルゥ

＊＊＊＊＊ｓｉｄｅ小さな定食屋の主人

じゅうじゅう、と肉の焼ける良い音が、店内へとこだまする。

「……」

先ほど入店してきた二頭組は、最近じゃあまり見かけなくなった人型両爬虫類種族。まぁ、最近はと言っても一昔前だってそれほど目に出来たわけでもないが……それにしても、長命種だって死ぬまでに一頭目に出来れば良い方だと以前旅人から聞いていたってのに二頭も見られるとは運が良いのかね、ワシも。

「ふっ」

まったく、長いこと根なし草をしていた若い頃は銭も無く、獲物にも逃げられ、食うもんにも困るほど運に見放されていたってのに……。番を得てからというもの、この王都へ腰を据えることも出来た。そして、小さいながらも店を持ち、今じゃこの界隈で此処を知らん奴はモグリだと言われるほど、経営もそこそこ上手くいっている。子供達にも恵まれて、ワシの数百余りの永き放浪生活は、現在の幸せの為であったのだと……そう信じずにはいられんものだ。

「ブルゥ、子供たちを連れて、少し買い物に出てくるわね」

分厚い肉の焼け具合をじっくりと見つめながら物思いにふけっていると、ワシの番らしいおっとりとした口調でそう告げられ、顔を上げた。

「……レーン、少し洒落込み過ぎじゃないか？」

カウンターごしに立つワシの番（つがい）、人型獣種猪族（ひとがたじゅうしゅのししぞく）のレーンを見つめる。……ふむ、ふっくりとしたその身体にこれまたふんわりとしたレースのワンピースを着て、誕生日にワシが送ったあの艶々とした薄紅の小さな貝殻で飾られている純白のリボンを、その可愛らしい小さな耳に結んだ番（つがい）の姿へ、つい熱い視線を送ってしまう。

「あらあら、そうかしら……？可愛くなぁい？」

「なぁい？」

「にゃい？」

「ない？」

ワシの小さくて可愛いレーンが小首を傾げ、その右に並ぶ子供たちも母の真似をするもので性質（たち）が悪い。

「……ワシのレーンが可愛くないわけがないだろう。しかし、もし他種の雄どもが寄って来たらどうするつもりだ？ワシはまだ店を閉められんしなぁ」

「まぁ、ブルゥったら」

照れてしまったレーンは、そのまるく柔らかい両手で桃色に染まった頬を隠し、つぶらな瞳を伏せる。その姿を見たワシは腕を組み、真剣にどうしたものかと考えてしまう。

「とぉちゃ、かぁちゃは、ぼくりゃがまもりゅ！！」

その時、ワシらの子で人型獣種（ひとがたじゅうしゅ）イノブタ族に分類される三つ子の一頭クプが元気のいい声でそう叫ぶのを聞き、つい顔が緩む。

「そうか、クプとクピとクポがレーンを守るか……まったく、チビ助のくせに大きく出たもんだな」

生まれたての頃は羊族の友獣（ゆうじゅう）に頼んで譲ってもらった貴重な羊毛を使い編まれた柔らかな毛布の上をころころと転がり、ぷぅぷぅ鳴くだけで何が出来るわけでもない、ワシに守られる弱い命だったと言うのに。

「子供の成長は早いものだな」

しみじみとワシが言葉を零せば

「もう、この子たちはまだ二十と半年ですよ？二軒先のトーリャ君が四十を過ぎたって聞いたのは何時だったかしら？……まだまだ、子の成長を懐かしむには早いのじゃないかしら」

と、レーンに諭されたワシはまだまだ言葉も歩行も拙（つたな）い三頭を見つめ、そう言えばこの子たちはつい最近ぽつぽつと喋れるようになったばかりの小さな幼獣なのだと思い出した。そう、ワシの作る飯を美味い美味いと食いながらも、磨き上げたテーブルや床に食べ散らかすほどには。

「そう、か……そうだったな。よし、今夜も美味い飯作ってやるから、ゆっくり買い物して腹ぁ空かして帰ってこい」

「はい、それじゃあ……行ってきますね。夜闇が空を覆う前には帰りますから」

子供たちと手を繋ぎ、レーンは出かけて行った。

「さて、肉はいい具合だな。後は……」

外はカリッと、中は血の滴るレアに焼き上げた分厚い怪虫の肉二頭前を、緑草の広げられた大皿へと盛りつけ、最後に自家製ソースをそっと添えれば……本日のおすすめ（肉食種族用）の完成だ。

「……上出来だな。良し、冷める前に運んじまうか」

大皿を乗せたプレートには、あらかじめ肉食種族の好む赤の実を潰し絞られた汁がコップ一杯に注がれ用意されている。

なぜ氷室にある冷えた汁を出さないのか、と聞かれれば、肉食種族があまり冷たい飲料を好まない習性を持つためと言える。以前、汁の売れ行きが伸びずに随分と悩み、普段は保存の関係で氷室で冷やしている飲料をある落ち込んでいた日、どうせ売れないのなら冷やす必要もない……と絞ったままの汁を出したところ何故か好評だった為に発覚した事実により始まったサービスだ。

「よっと」

す、と音を立てずに重そうな料理を大きなプレート一杯にのせて客が待つテーブルへ進む。

「……待たせたな、本日のおすすめだ。内容は怪虫のレアステーキ、赤の実を絞った汁、共に二頭前だ」

ことり、テーブルへと大皿と取り皿、赤色の汁が揺れるカップを並べれば……ん？黒い鱗を持つ両爬虫類の野郎がその鋭い瞳を細めている。
何故だ？怪虫の肉と言えば肉食種族共の好物のはずだが……赤い実の汁がいけないのか？

「……なにか、料理に問題でも？」

つい、料理人のプライドゆえか、気が付けばそう問いかけているワシがいた。

「……いや」

黒い鱗の雄はこちらを見て、言葉少なにそう否定したが、しかしその瞳は細められたまま。

「おいおい、主人。こいつも悪気があっての事じゃねぇんだ。故郷の仲間内でも無愛想だと評判でなぁ、まぁ許してやってくれ」

納得がいかずに双方で睨みあっていれば、場を和ませるつもりなのか緑の鱗の雄はそう笑い、ワシを見るもので

「……まぁ、良いさ。飯は楽しく食うもんだしな」

ま、レーンのいない間に問題を起こすわけにもいかんしな。そう己へ言い聞かせ、納得のいかないわだかまりを心へ仕舞い込み、先に折れたワシは大人しく厨房へと踵を返した。
そして客のテーブルから遠ざかりつつ、耳に届いたのは……

「ほら、お前も食え。食ったらさっさと渡すもん渡して俺は故郷

へ帰るからな」

……何と言うか、噂に違わぬ引きこもり一族だな。緑の鱗をした雄は明らかに旅装束、先ほどこの王都へ辿り着いたばかりのような様子だと言うのに、もう故郷の話か。ふむ、そういえばワシも随分故郷から遠ざかっていたなぁ……もう少し成長したらチビ助たちとレーンを連れて里帰りも良いかもしれねぇな。

「ふ……」

あんな風に故郷へ引き籠るのはあまり褒められたものじゃねぇが、ワシのように全く寄り付かないってのもそれはそれで問題だしな。子の少ない長命種ゆえ歳のいった奴ばかりの集落だが、まぁその分チビ助たちも可愛がってもらえるだろう。

第八話　愛妻家のブルゥ（後書き）

紹介欄です。

ブルゥ

人型獣種豚族（雄）

長いこと放浪していた根なし草だったらしいが、現在は猪族出身の番（つがい）と、その間に生まれたハーフのイノブタ族に分類される三つ子の息子たちと共に一階が定食屋、二階が自宅の煉瓦で建てられた可愛らしい二階建て一軒家に住んでいる。

ちなみに家族を、特に番（つがい）であるレーンを溺愛している。

レーン

人型獣種猪族（雌）

豚族の雄を番（つがい）に持ち、幼い三つ子を抱え定食屋を手伝うおっとりとした良妻賢母。編み物が得意で、出来上がった作品は番（つがい）であるブルゥの手により定食屋の店内に飾られている。

クプ・クピ・クポ

人型獣種イノブタ族（雄）

生まれてまだ二十年余り、最近言葉を覚え始めたばかりの可愛い盛りで、見た目はまるく……まるい。三つ子なのでいまいち違いを見て取ることは出来ないが、母であるレーンの手によりいつも一頭ずつ色違いの洋服を着せられている。

怪虫

とてつもなく巨大化した虫。種類は多く、食べ比べをする美食家もいるほど生でも焼いてもジューシーで美味らしい。しかし、生きているときに出会えば危険はなくともその見た目の気持ち悪さや動

き方が脳裏に焼き付き、暫くの間夢で魘される保証付き？
注意　ちなみにこの怪虫肉は肉食種族用であり、草食種族および水中種族にこの料理を出すと明らかに引きます。

赤の実の汁
何の変哲もない木の実の汁。
肉食動物は赤の木の実を絞った汁を。草食動物は赤の木の実ではなく、緑の木の実が絞られた汁を好む。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0255y/

その男、レプティリアンにより

2011年11月27日01時45分発行